

今昔物語集の視点と文末形式

——卷十六を例として——

一 はじめに

物語文におけるいわゆる語り手の視点は文末表現に顕著に表れる。筆者はこれまで、拙稿(二〇〇三)において物語文に現れる視点について分類案を示し、拙稿(二〇〇三・二〇〇四)において現代小説の「羅生門」を取り上げ、拙稿(二〇〇五)において今昔物語集卷一六ノ七を取り上げ、解析例を示しておいた。本稿では、古典作品の様相を知るために、今昔物語集卷一六の全話を対象として調査し、視点の内容毎に見られた特徴的な文末形式を整理し、現代小説の場合と対照しておく。卷十六には、漢文の出典(日本霊異記と法華験記、扶桑略記)による二一話と、出典未詳の一八話とからなっている。卷一六を取り上げるのは、漢文を典拠とする場合と、和文的な出典によると推測される出典未詳話^①とを分けて文末表現の傾向

を比較し、両者における共通点・相違点を確認することが可能であると考えるためである。

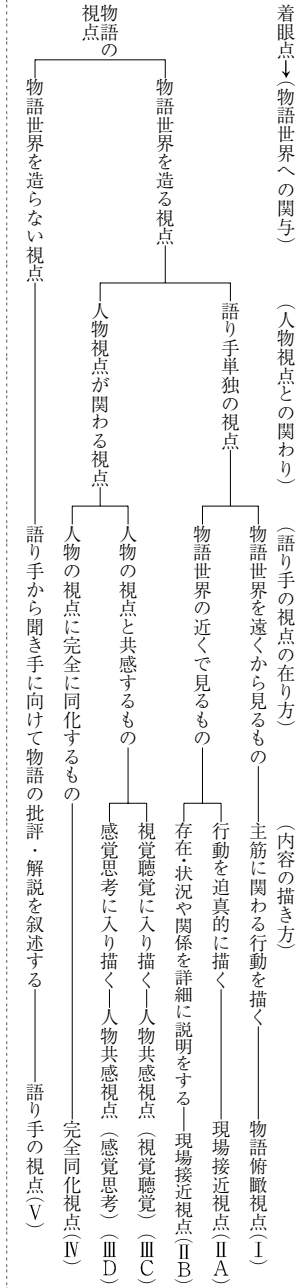
筆者の視点内容による分類の詳細な説明については、拙稿(二〇〇二)において述べておいた。ここでは次のような簡略な呼称で示すとともに、分類の図を次に示しておく。

- I 物語俯瞰視点(物語の筋の叙述)
- II A 現場接近視点(追真的描写)
- II B 現場接近視点(説明的表現)
- III C 人物共感視点(視覚・聴覚)
- III D 人物共感視点(感覚・思考)
- IV 完全同化視点(直接話法による会話)
- V 語り手の視点(批評・解説・草子地)

これらは物語世界への関与しているかどうかで、物語構築に関わら

藤 井 俊 博

《物語における視点の分類》
着眼点↓(物語世界への関与)



ないVと、物語構築に関わるI〜IVに大きく分けられる。後者については、人物視点との関わり、語り手の視点の在り方、内容の描き方によってさらに分類することができる。これを次のように図示するとともに、I〜Vの内容を現代小説の場合に即して説明しておく。

Iは語り手の俯瞰的な視点から話の主筋を描くものである。Iの表現を繋いで読むと、そこに描かれる事柄の時間的な間隔は、現実的な時間の展開に比べて緊密度が低く、時間的に大きな間隔があるのが通常である。

これに対し、II Aは、語り手が視点を物語の内部に止めて、現場の様子を迫真的に描くものである。Iが話の主筋の内容を大きな時間間の流れを捉えて描写するのに対し、II Aの文が並んだ表現は現場

の動的な様子を現実の時間の進行に近い緊密な展開によって描写するものになる。IとII Aは「た」を採るか採らないか、すなわち語り手の視点に戻るか戻らないかという点で差はあるが、動的な様子を緊密に描くか描かないかという点は決定的に区別できるものではなく、連続的なものとして捉えられる。すなわち、「た」を文末に採っていても緊密な時間の流れの描写もあり得るし、「動詞終止形」を採っていても緩やかな時間の流れを描くこともあり得る。

II Bは、主筋の展開する時間を止めて、その時点における存在・状況や関係・背景を詳細に説明するものである。物事の存在を表す「名詞十ある・いる」、状況を動的に説明する「動詞十ている・ある」や静的に説明する「動詞十ない」「形容詞・形容動詞」、事物の

関係を名詞述語で説明する「名詞十である」、事物の背景を動詞述語で説明する「動詞十である」がある。

ⅢC・ⅢDは、「見る・聞く」「感じる・思う」等を述語とする文であり、物語の筋を人物視点と共感しながら述べる形である。「見る」「思う」等の動詞にⅡBの「ている」「のである」が付く場合は人物視点と語り手の視点が二重化している場合である。「見るといっている」のような例も多く、「見るといっているへと見える」のように解釈され、「見る」を述語とするものと同列に扱うことができる。Ⅳは直接話法の会話部分であり、語り手の視点は零になる。Ⅳの部分だけが投げ出されて一文になる場合もあるが、地の文に包摂される場合もあり、その場合は、地の文の文末によって分類する。

Vは、観念的な語り手の立場から観念的な聞き手に向けて批評・解説などを叙述する表現である。これは、物語世界の構築に直接関わらず、それを取り除いても物語世界の理解に全くマイナスのないものである。いわゆる「はさみこみ」「草子地」と言われるものは、語り手から聞き手に向けてなされる表現で、物語内容の構築に関わらない場合を典型とするが、物語内容の構築に間接的に関わる場合もある。全く物語世界の内容に付け加える情報がない明確なものとして、今昔物語集の説話末の評語のようなものが挙げられる。これは類話の宇治拾遺物語に見られないことから、物語世界の枠外のは

情報を述べるものであることが明らかである。

二 文末形式の概要

次に、右のような現代小説の表現に対応するものとして、古典の物語の基本的な文末形式を記述する。

まず、動詞を中核としたものとして、次のようなものがある。

- ① 「動詞」(現在形)、「動詞十けり」(過去形)
- ② 「動詞十つ・ぬ」(現在形)、「動詞十てけり・にけり」(過去形)
- ③ 「動詞十たり」(現在形)、「動詞十たりけり」(過去形)
- ④ 「動詞十なり」(現在形)、「動詞十なりけり」(過去形)
- ⑤ 「動詞十ず」(現在形)、「動詞十ざりけり」(過去形)

また、名詞を述語の中核とするものは、

- ⑥ 「名詞十あり」(現在形)、「名詞十ありけり」(過去形)
- ⑦ 「名詞十なり」(現在形)、「名詞十なりけり」(過去形)
- ⑧ 「名詞十なし」(現在形)、「名詞十なかりけり」(過去形)

この他に、形容詞・形容動詞を中核としたものや、推量の助動詞の付されたものが見られる。

- ⑨ 「形容詞」「形容動詞」(現在形)、「形容詞十けり」「形容動詞十けり」(過去形)
- ⑩ 「動詞十べし」「動詞十む」「動詞十けむ」

ここで、これらの基本的な文末形式について、視点のどの分類に
対応するかについて、基本的な対応関係を示しておく。

I Ⅰ①「動詞十けり」②「動詞十てけり・にけり」が当てはまる。

（動詞が「視覚・聴覚」の内容ならⅢCに、「感情・思考」
ならⅢDで扱う。「ありけり」はⅡBで扱う。）

ⅡA Ⅱ「動詞」（現在形）「動詞十つ・ぬ」（現在形）が当てはまる。
（動詞が「視覚・聴覚」の内容ならⅢCに、「感情・思考」
ならⅢDで扱う。）

ⅡB Ⅱ③「動詞十たり」（存在継続）④「動詞十なり」⑤「動
詞十ず」（否定的状態）⑦「名詞十なり」（断定）⑥「名詞
十あり」（存在）⑧「名詞十なし」（非存在の状態）⑨「形
容詞・形容動詞」（状態）の現在形と過去形が当てはまる。

ⅢC Ⅲ「視覚・聴覚」に関わる動詞が用いられた場合が当てはまる。
（①の現在形と過去形、および⑤の現在形を文末形式に採
るものに加えて、「見レバ」等において③④⑥⑦⑧⑨の過
去形・現在形を採り「視覚・聴覚」の内容を表す場合があ
る。）

ⅢD Ⅲ述語に「感情・思考の形容詞」「感情・思考の動詞」など
来る場合が当てはまる。（文末形式に①⑤の現在形・過去
形、⑨の現在形を採る場合がある。また、これらをⅡB

「事无限シ」などの形式で承ける場合も含める。）

Ⅳ Ⅳ直接話法の会話部分¹が当てはまるが、今昔物語集では投げ出
し型の会話文は存在しないため、用例数は零になる。

V Ⅴ⑩のような形式をはじめとする語り手の立場からの判断
を表す助詞・助動詞を採る文が当てはまる。

次に、巻一六の表現を記述するに際して具体的に留意した細部
の点を次に記しておく。

一、Ⅳとして会話文のみから成る文は今昔物語集においては存在
しない。会話文の引用では「云ク『』ト。」で終止する場合
が多いが、このような「ト。」で終止する文を「ト云フ」の略
と見て、本稿ではⅡAに入れて扱うことにする。

二、ⅢDに関わる形式としてあげた「事无限シ」も、今昔物語集
では感情を表す動詞・形容詞に付いて強調する特徴的な形式で
ある。「騒ク事无限シ」「泣ク事无限シ」「光リ輝ク事无限シ」
のような動作・状態を強調した例はⅡBに入れたが、「心細キ
事无限シ」「怖シキ事无限シ」「喜キ事无限シ」のように感情を
強調したと解せるものはⅢDに入れておいた。

三、ⅢC・ⅢDに関わる類例として「无シ」を含む述語形式があ
る。「不費スト言フ事无シ」（六話）「貴ビ不悲ズト云フ事无シ」
（七話）「恨ミ申スヨリ外ノ事无シ」（三二話）のように感情表

文未形式	I	II A	II B	III C	III D	IV	V	合計
動詞＋けり	28				5			33
動詞＋ける			3				1	9
動詞＋けむ							1	1
動詞＋けぬ							1	1
動詞＋けるなりけり							1	1
動詞＋たりけり			1					1
動詞＋たりける			2					3
動詞＋たるなりけり								2
動詞＋てけり								7
動詞＋にけり	20							20
動詞＋にけれ	1							1
動詞＋にけるなりけり					1			1
動詞＋ざりけり								4
動詞＋なりけり								8
形容詞＋けり				5				5
形容詞＋けり								1
名詞＋ありけり							1	1
名詞＋ありける								5
名詞＋なかりけり								10
名詞＋なかりける								5
名詞＋にてありける								5
なりけり			1					1
合計	62	0	49	10	6	0	4	131

(表三) 出典の未詳の話(「けり」を含む形成)

文未形式	I	II A	II B	III C	III D	IV	V	合計
動詞＋けるなり			2					2
動詞＋けるにや							1	1
動詞＋たり							1	1
動詞＋たるなり							1	1
動詞＋り								8
動詞＋つ								19
動詞＋ぬ			2					82
動詞＋む								1
動詞＋むや								1
動詞＋むやは								1
動詞＋めり								1
動詞＋べし								2
動詞＋まし								2
動詞＋ず								1
動詞終止形			8					23
動詞終止形								1
動詞終止形								55
形容詞連体形								1
形容詞(かたし)								1
形容詞(ことかぎりなし)								1
ごとし			2					3
合計			2				1	3

(表四) 出典の未詳の話(「けり」を含まない形成)

(卷一六ノ第一話の解析例)

(1) II B	今昔、 天皇ノ御代ニ、伊豫ノ国、越智ノ郡ノ大領ガ先祖ニ、越智ノ直ト云フ者有ケリ。
(2) I	百済国ノ破ケル時、彼ノ国ヲ助ケムガ為ニ、公ケ、数ノ軍ヲ遣ス中ニ、此ノ直ヲ遣シケリ。
(3) II A	直、彼ノ國ニ至テ助ケムト為ルニ、不堪スシテ、唐ノ方ノ軍ニ被取テ、唐ニ將行ヌ。
(4) II B	此ノ国ノ人、八人、同ク有リ。
(5) III D	一ノ洲ニ籠メ置タレバ、同ジ所ニ八人有テ、泣キ悲ム事无限シ。
(6) III C	今ハ本朝ニ返ラム事望ミ絶タル事ナレバ、各、父母・妻子ヲ恋ル程ニ、其ノ所ニシテ観音ノ像一軀ヲ見付奉タリ。
(7) II B	八人、同ク此レヲ喜テ、心ヲ発シテ念ジ奉ル様、「観音ハ、一切ノ衆生ノ願ヲ満給フ事、祖ノ子ヲ哀ガ如シ。而ニ、此レ、難有キ事也ト云フトモ、慈悲ヲ垂給テ、我等ヲ助テ、本國ニ令至メ給ヘ」ト泣ク申シテ、日来ヲ過ル程ニ、此ノ所ハ、余方ハ皆可逃キ様无ク、人皆有ル方也、只後ロノ方、深キ海ニシテ、邊リニ多ノ木有リ。
(8) II A	八人同ク議シテ構ヘ謀ル様、「蜜ニ此ノ後ロノ海ノ辺ニ有ル大ナル松ノ木ヲ伐テ、此レヲ船ノ形ニ刻テ、其レニ乗テ蜜ニ此ヲ出デ、人不通ヌ海也ト云フトモ、只海ノ中ニシテ死ナム。此ニテ死ナムヨリハ」ト議シテ、八人シテ此ノ木ヲ伐テ忽ニ刻リツ。
(9) II B	此ニ乗テ、此ノ観音ノ像ヲ船ノ内ニ安置シ奉テ、各、願ヲ発シテ、泣ク々々念ジ奉ル事无限シ。
(10) II B	国ノ人、後ロヲ疑フ事无クシテ此レヲ不知ズ。
(11) II B	而ル間、自然ラ、西ノ風出来テ、船ヲ、箭ヲ射ガ如ク直シク、筑紫ニ吹キ着タリ。

今昔物語集の視点と文末形式

(12) III D	「此レ偏ニ、観音ノ助ケ給フ也」ト思テ、喜ビ乍ラ岸ニ下テ、各、家ニ返ヌレバ、妻子此レヲ見テ喜ビ合ヘル事无限シ、事ノ有様ヲ語テ貴ビケリ。
(13) II A	其ノ後、公ケ、此レヲ聞食シテ、事ノ有様ヲ被召問ルニ、有シ事ヲ不落ヌ具ニ申ス。
(14) II A	此レヲ公ケ聞シ食テ、哀ビ貴ビ給テ、申サム所ノ事ヲ恩シ給ムト為ルニ、越智ノ直申シテ云ク、「當國ニ一ノ郡ヲ立テ、堂ヲ造テ此ノ観音ノ像ヲ安置シ奉ラム」ト。
(15) I	而ルニ、公ケ、「申スニ可随シ」ト被仰下ヌレバ、直、思ノ如ク、郡ヲ立テ、堂ヲ造テ、其観音ノ像ヲ安置シ奉ケリ。
(16) V	其ヨリ後今至ルマデ、其ノ子孫相傳ヘツ、此ノ観音ヲ恭敬シ奉ル事不絶ヌ。

対応する表現であると考えられる。例に示した第二話の場合では、「けり」の使われる内容は、冒頭部で人物の身の上を示す部分(第一文・II B)や事件のきっかけになる文(第二文・I)であり、また事件の結末の部分(第一五文・I)に用いている。拙稿(二〇〇五)で述べたように、出典未詳の第七話では、展開部においても、人物の身の上を解説的に述べる部分に限り「けり」を用いている。ちなみに、漢文説話を出典とする二話中で、「けり」で終止する文は三二例であり、「にけり」で終止する文は八例のみである。これに対して、出典未詳話の一八話中で、「けり」で終止する文は三三例であり、「にけり(にける)」で終止する文は二二例にのぼり、

また、出典未詳話のみに見られる形式として「てけり」で終止する文が七例ある。漢文說話を出典とする場合は「けり・にけり・にけり・てけり」の使用率が少ないが、これは第二話の例に明らかかなように、漢文を出典とする話において、人物の背景や事件のきっかけを説明する冒頭部や、事件の結末や後日談的な内容を述べる結尾部にのみ「けり」を付加したためと見ることができるといえる。

現代小説のような「た」による二元的な表現と異なり、次節に述べるように、「けり」と「つ」「ぬ」とが話の中で二元的に使い分けられている点に特色がある。

(2)、II A 現場接近視点 (迫真的描写)

(主たる文末形式) 「動詞終止形」「動詞+つ」「動詞+ぬ」

II A の形式は、現場に接近した視点を保っている点、I と相違する点である。現代小説で、II A が連続するときには時間進行の緊密度が高く、現場の実際の時間の流れに近い形で描写されるのに対し、話の主筋を進める I は時間の流れが緊密ではなく、比較的大きな場面の展開を表現する場合が多い。ただし、II A と I とは時間を追って話の筋を進める点で共通しており、ただ時間進行の緊密度の点に相対的な違いがあったのである。

これに対し今昔物語集の II A は、拙稿(二〇〇五)でも指摘したように、アスペクト助動詞「ぬ」を用いる場合は時間的な緊密度が

比較的 low、I に近い側面があると考えられる。第二話では、第三文の「ぬ」を含む文は事件のきっかけを表す、いわゆる場面起こし的な用法である。これに対し、「忽二」を含む第八文(〜ツ)や、会話文を含んだ第一三文(動詞終止形)・第一四文(〜ト)は、迫真的な描写の部分である。この例から分かるように、動詞終止形や「つ」の表現と「ぬ」の表現とは、時間展開の緊密度に差が認められる。すなわち、今昔物語集の「けり」「つ」「ぬ」には次のような差があると思われる。

(I) 「動詞+けり」	視点	展開緊密度
(II A) 「動詞+ぬ」	近い	やや低い
(II A) 動詞終止形・「動詞+つ」	近い	高い

I の「けり」とともに II A の「ぬ」「つ」においても、いずれも時間軸に沿って事件を進める機能を持つが、「けり」よりは「ぬ」、そして「ぬ」よりは「動詞終止形」「つ」の方が時間関係の緊密さが強まっていくと考えられる。このように、今昔物語集では現場に接近した視線からアスペクト助動詞である「ぬ」「つ」によって話の筋を進める点を、古典語に独自の特徴として指摘できる。

本朝世俗部になると展開部でも「けり」を用いて話を進める巻も

多くあるが、本朝仏法部においては「けり」は冒頭部と結尾部に使われる傾向が強い。しかし、卷一六の説話では、全般に「けり」の使用が人物の解説をする冒頭部や事件の結末部に限られるため、それに代わってⅡAの「ぬ」が事件展開部の主筋を示す役割を担うことになっていられると思われる。

例に挙げた第二話の場合では、「ぬ」が「将行ヌ」のように用いられている。この「行く」のように移動に関わる動詞は、Ⅰで用いる場合は「にけり」の形を取って大きな場面の転換を表す例が多い。次に挙げた動詞はⅠの「にけり」とⅡAの「ぬ」と両方がつくもの卷一六での例数^②であるが、動詞の意味は次のように「移動」「変化」の意味に偏って現れる。

〔移動〕 行く（Ⅰに2例、ⅡAに8例） 出づ（Ⅰに1例、ⅡAに5例）

落つ（Ⅰに1例、ⅡAに1例） 返る（Ⅰに2例、ⅡAに5例）

来る（Ⅰに2例、ⅡAに3例） 通ず（Ⅰに1例、ⅡAに1例）

参る（Ⅰに1例、ⅡAに1例）

〔変化〕 失す（Ⅰに3例、ⅡAに3例）

成る（Ⅰに6例、ⅡAに8例）

止む（Ⅰに1例、ⅡAに1例）

「移動」や「変化」の意味の動詞は、場面を大きく進める表現に關わることが多い。「移動」や「変化」の動詞を使うのに、展開部で

事件の展開を進める時には通常「ぬ」を用いるが、場面の大きな切れ目（いわゆる「場面閉じ」）では語り手の立場が現れ、「けり」を伴った「にけり」を使うことになるのである。「ぬ」の文章展開上の機能については、これまで鈴木泰（一九九九）や西田隆政（一九九九）などが場面起こし、場面閉じなどの機能を指摘しているが、これらの傾向を踏まえると、「ぬ」は展開部で場面や状況の変化を表現する文に用いると総括できるのではなからうか。なお、「ぬ」の使用は、漢文を出典とする話では四八例であるのに対して、出典未詳の話では七九例と多く見られることから、「ぬ」は和文的な文体に現れやすいと言えよう。

（3）、ⅡB 現場接近視点（説明的表現）

（主たる文末形式）「動詞十たり・たりけり」「動詞十なり」「動詞十ず」「名詞十あり」「名詞十なり・なりけり」「名詞十なし」

ⅡBは、事件の時間的な展開を止めて、その時の状態や事柄の關係を詳細に説明するものである。第二話の冒頭部の第一文には、

今昔、□ 天皇ノ御代ニ、伊豫ノ国、越智ノ郡ノ大領ガ先祖

ニ、越智ノ直ト云フ者有ケリ

のような人物紹介の例があり、展開部では、

此ノ國ノ人、八人、同ク有リ（第四文）

此ノ所ハ、余方ハ皆可逃キ様无ク、人皆有ル方也、只後ロノ方、

深キ海ニシテ、邊リニ多ノ木有リ。(第七文)

此ニ乗テ、此ノ観音ノ像ヲ船ノ内ニ安置シ奉テ、各、願ヲ発シテ、泣々ク念ジ奉ル事无限シ。(第九文)

国ノ人、後ロヲ疑フ事无クシテ此レヲ不知ズ。(第十文)

のように指示語「此」によって前文の内容を承け、補足的な情報を説明する文に用いている。また、

而ル間、自然ラ、西ノ風出来テ、船ヲ、箭ヲ射ガ如ク直シク、筑紫ニ吹キ着タリ。(第十一文)

のように、「而ル間」で時間の経過を示し、新たな事態を提示する場合もある。これは物語の背景となる新たな情報を提示するという点で、冒頭部の「ありけり」の用例に通じる用法である。

なお、右のような文末形式は出典未詳の話と漢文を出典とする話とに共通して見られるものであり、巻一六において主要な形式として存在しているものである。拙稿(二〇〇三・二〇〇四)において、現代小説のⅡBの表現内容および文末形式として、

「状態」(継続状態の「ている」「てある」、否定的状態の「な

こ)

「説明」(肯定判断の「である」、背景説明の「のである」

「存在」(「名詞+いる・ある」)

「非存在」(「名詞+ない」)

を挙げた。これに対比して示すと、今昔物語集にも、

「状態」(継続状態の「たり」「り」、否定的状態の「ず」)

「説明」(肯定判断の「なり」、背景説明の「なりけり」

「存在」(「名詞+あり」)

「非存在」(「名詞+なし」)

などの文末形式が存在し、基本的な内容として現代小説と共通する要素を指摘できる。

なお、これに加え、出典未詳の話ではこれらの組み合わせによる独自のバリエーションが多く、「けるなり」「けるなりけり」「たるなりけり」「にてありけるなりけり」「形容詞」「形容詞+けり」「こ」とし「名詞+なりけり」などの表現が見られた。

(4)、ⅢC人物共感視点(視覚・聴覚)

(主たる文末形式)「動詞(見ル・見ユ等)+ず」「動詞終止形(見ル・見ユ等)」「動詞+たり・り」「名詞+あり・ありけり」

「名詞+なり」「名詞+なし・なかりけり」

ⅢCは、登場人物の「視覚・聴覚」に関わる表現で、現代小説と同様に多様な文末形式が見られる。出典の有無に関わらず見られる表現である右の形式が主要なものとして挙げられる。これらは述語に「見る」「聞く」を用いて「不見ズ」「見ル」のように用いる場合と、「見ルニ〜也ケリ」「見ルニ〜有リケリ」「見ルニ〜タリ」のよ

うに見た内容を述語とする場合とがある。後者の場合は「ト見ユ」のような動詞が省略されていると解釈されるものであり、表現内容として「見ル」等を述語とするものと連続していると言える。第二話の例では第六文に「見付奉タリ」の例がある。これに続く第七文の「後ロノ方、深キ海ニシテ、辺リニ多ノ木有リ。」はいちおう語り手の視点によるⅡBの表現としておいたが、第六文をうけて人物視点から見た内容を叙述した文(ⅢC)とも解されるのである。

この他、出典未詳の話に特有の文末形式として、「動詞十なりけり」「動詞十めり」「形容詞」「形容動詞」「名詞十なりけり」「名詞十ありけり」「名詞十なかりけり」など、見た内容を述語とする形式に多様性が見られた。

(5)、ⅢD人物共感視点(感覚・思考)

(主たる文末形式)「動詞十けり」「動詞十ず」「動詞終止形」
「名詞十なし」「形容詞」「事無限し」

ⅢDは、登場人物の「感覚・感情・思考」に関わる表現で、「永キ契ヲ思フ」(八話)「妬ク悲シ」(二〇話)のように感情を表現する動詞・形容詞による場合と、「起キム心地モ不為ズ」(八話)「思フニ、為ム方无シ」(二〇話)のように感覚・感情・思考の内容そのものを表す場合がある。中でも、第二話に二例が見られる次の例(ただし、二例目は、文中のため表の数値には含めていない)、

一ノ洲ニ籠メ置タレバ、同ジ所ニ八人有テ、泣キ悲ム事無限シ。
(第五文)

妻子此レヲ見テ喜ビ合ヘル事無限シ、……(第十二文)

の例のように、感情を表す「形容詞」「動詞」に「事無限し」が続く例が漢文の出典のある話を中心に三六例も見られる。

この他、出典未詳の話には「つ」「めり」「にけるなりけり」、出典がある話には「たり」「ぬ」などが見られた。

(6)、Ⅳ人物完全同化視点

今昔物語集では、会話文のみから成る文は存在しない。第二話の例には存在しないが、今昔物語集では、「主語十云ク」「ト。」の形式を探る例が多く、会話内容を承ける「云ふ」が省略される例が多い(これはⅡAに分類したが、ⅡAの三九三例中、一一三例が「ト。」で終止する例である)。これによって会話内容の範囲を明らかにしながら、あたら限り自然な会話の連続を作りだしている。これによって、完全同化視点による投げ出し型の会話文が連続する現代小説のスタイルに近い効果を実現していると言える。

(7)、V語り手の視点

(主たる文末形式)「動詞十けり」「動詞十けむ」「動詞十べし」
「動詞十ず」「名詞十なり」

主として話末評語に見られる語り手の視点による解説部分であり、

「けむ」「べし」など推量の助動詞がVの独自の文末形式である。

これらの形式を出典の有無で見ると、漢文の出典のある説話に特有のものは「動詞十なりけり」「動詞十じ」「動詞終止形」「形容詞十なり」「形容詞命令形」「形容動詞」「名詞十あり」などであり、助詞助動詞による複雑な表現は見られないが、出典未詳の話のみに見られる形式として、「けめ」「ありける」「けるにや」「ごとし」「たり」とぞ」「にやあらむ」「む」「むや」「むやは」「動詞十なり」など助詞・助動詞の組み合わせによる多様な表現が見られた。

四 まとめ

以上、巻一六を例として、今昔物語集における視点の在り方と文末形式の実態を検討した。巻一六では出典のあるものとないうものに共通する文末形式が存在しており、それらが今昔物語集における基本的な文末形式であると推測された。また、視点の表す表現内容の面では、II Bのような多様な文末形式の見られる場合でも、おおむね現代小説のII Bの表現内容に対応することが明らかになった。

ただし、「けり」と「つ」「ぬ」の使い分けの実態などは現代語に比べてより複雑な様相を見せており、このような点に古典語に特有の問題点も見出された。さらに、全巻に渡った傾向の調査や、現代小説の表現との比較など残された課題は多い。

注

- ① 出典のある話は、一・二・三・四・五・六・八・一〇・一一・一二・一三・一四・一六・一七・二三・二五・二六・二七・三五・三六・三八の総計二話、出典未詳の話は、七・九・一五・一八・一九・二〇・二二・二二・二四・二八・二九・三〇・三一・三二・三三・三四・三七・三九の総計一八話である。

- ② 拙稿(二〇〇三・二〇〇四)において、芥川の小説でIには発言・移動・働きかけに関わる動詞が多いことを指摘した。今昔物語集では、「けり」に付く動詞で約30%、「ぬ」の付く動詞で約60%が移動に関わる動詞で占められている。

参考文献

- 鈴木泰(一九九九)『改訂版 古代日本語動詞のテンスとアスペクト―源氏物語の分析―』ひつじ書房
 西田隆政(一九九九)『源氏物語における助動詞「ぬ」の文末用法―場面起こしと場面閉じをめぐって―』(『文学史研究』40)
 藤井俊博(二〇〇三)『今昔物語集の表現形成』和泉書院
 藤井俊博(二〇〇三・二〇〇四)『物語文の表現と文末形式 芥川作品を通して―(上・下)―』『同志社国文学』59号・60号
 藤井俊博(二〇〇四)『物語文の指示語と視点―今昔物語集を通して―』『同志社国文学』61号

藤井俊博(二〇〇五)『物語テキストの視点と文末表現』『日本語学』第24巻第1号